



賡作幽霊晚餐会

tontokaimo39

賡作幽靈晚餐會

「永井君！夕子君だろうか？」

「えっ？あつ深沢さん！お久しぶり！」

おいまたか：夕子と歩いていると、よくこういう出
会いがある、そしてこれまた決まったように最寄り
の喫茶店へ、夕子はうれしそうだが、私にはあまり
うれしくない、いや、相手が若い男性だからとやけ
るわけでもないし、先を急ぐからでもない、夕子は
若いのだから知り合いも若くて当然だろうし、二人
の今日の予定が少々遅れたからといって、何か支障
が起こるわけでもない、問題はこの状況の後にある、
こうした後には、事件というあまり歓迎したくない
ものが大抵待っているからだ。

「こちら私の叔父です」

うん？夕子が私を他人に紹介する際、初めの頃はよ

く叔父だといった、ところが最近は、私の彼だのお相手だのと平気で口にする。

「深沢さんは大学の先輩よ、今では確か毎毎新聞の敏腕記者ね」

「おい夕子君、敏腕は余計だよ」

「あら、じゃあ鈍腕」

「おい、相変わらずだな君は」

そういうことか、相手が新聞記者なので叔父だとかまかしたのだな、彼だ、というとあれこれ詮索をするに違いない、そこで警部だといってしまつては話が弾みにくくなる、夕子はこういうことによく気づくのだ。

「深沢さんは、私が二年生になる年に卒業されたのだから、そうか、四年ぶりね」

「ああ、話すのは四年ぶりだが、君を見たのはそんなに前じゃないよ」

「ええっ！どういうこと？」

「ほら、ホワイトマーメイド事件、あの事件に君が絡んでると知ってずいぶん驚いたなあ、しめた！特ダネが取れると喜んだのに、君はすぐ隠れてしまったじゃあないか」

「あああれね、マスコミがあまりにもうるさいのでしばらく叔父さんの家に寝泊まり：フッフ」

「そのフッフは何だい？しかし酷い目にあったね」

「ありがとう、けっこうおもしろかったのよ、でもおかげで今なお大学生」

「うん？夕子が二年の時に卒業ならわずか一年間のつき合いじゃあないか、それにしても親しそうだ、一

年生と四年生では特別な関係がない限り個人同士の交流は：

「学内新聞の編集部に、新入生の夕子君を私がスカウトしたのですよ、普通ならまだ学内の事情がわからない新入生をさそうことはないのですが、偶然夕子と君出会あっているいろと話しあっているうちに、この人は凄いなと思ひましてね」

私の疑問を察したかのように、深沢が説明する。

「こら、本当は私の美貌のせいでしょ、フフでも新聞部おもしろかったわ、そうだ変な刑事ともみ合いになつてね、二人ともプールヘザブン、でもあの時會つたニヤンコ、可愛かつた：」

「えつ、そんなことがあつたの、私の卒業後だな」

「で、深沢さん結婚は？」

「まだ独身だよ」

「あら、じゃあいい人は？」

「いたのはいた…」

「えっ、過去形じゃないの、そうか、振られたんだな」

「結果としてはそうなんだが…」

「どういうこと？」

「この人ならと思ってプロポーズした」

「そこで振られた、この人敏腕じゃあないわ、鈍腕記者なんてお呼びじゃないって」

「おいおい、事実はまあそうだろうなあ…」

「ふうん、じゃあ他に何かあるのね」

「プロポーズの翌日、突然彼女はいなくなった、消えてしまったんだ」

「消えたの、じゃあ幽霊だったわけ？」

「本当の幽霊ならともかく、嫌だからといって消えることはないだろう、ところが本当に消えた、行方不明なんだ、携帯は不通ア。パートは解約していた」

「先輩新聞記者でしょう、探したの？」

「いやつい最近のことだよ、もちろんすぐ探そうとした、嫌なら嫌でいいから返事だけは直接聞きたいと思ってさ、ところが高知行きになってしまつて」

「何それ？」

「社内の人事異動だよ、私は高知県のM市に左遷、市といっても町村合併で生まれた所で、まだ村といった方が似合うような所だそうだが、そこの支局さ」

「左遷って何したの、失敗？わかった女性問題」

「おいこら、まあ自分の失敗なら潔く行くさ、しか

し何も思い当たることがない、上司に逆らったり社の方針に背いたこともないし、仕事も人並みにはしていたつもりなんだが……」

「まあ二、三年田舎で辛抱しろ、帰ったらすぐ昇進ということだろう？」

私が口をはさんだ。

「ええ、それはわが社にもよくあることだそうです、でもその約束はみんな内々に聞かされているんですね、ところが私にはそんな話は何もない、一方的にM支局の勤務を命ず、ですよ」

「夕子、また事件とデートになりそうだぜ」

「それ毎毎新聞記者殺しでしょ、確かに先輩がいる所だけど偶然よ、私には関係ないじゃない」

「ところがその先輩の深沢が第一の容疑者だ」

「えっ！」

毎毎新聞の記者が、アパートの自室で刺殺されていたのは三日前だ、毎毎新聞といえど代表的な三紙には及ばないものの関東周辺ではよく知られている全国紙の一つ、何かカタツムリのような名前だが購読者の数はけっして少なくない、それだけにマスコミは大きく取り上げている。

「死体発見は早朝だが、死亡時刻は前日の午後十時頃、その時刻に深沢は被害者後藤の部屋を訪ねていた、加えて二人は犬猿の仲だったというんだな」

「そうなの、で、深沢さんどういってるの？」

「来てくれという電話があったという書付が彼のデスクに置いてあった、そこで出かけたところ、後

藤は、お前なんか呼んだ覚えはない、顔も見たくないといったそうだな、そこで口喧嘩になったが、すぐ帰ったといっている」

「ふうん、もちろん殺人は否定したのでしょ」

「ああ、だが捜査の担当者は、深沢が左遷になったこと、それから恋人に振られてむしゃくしゃしていることなどを聞き込んだのだな、そこで喧嘩の際ついカツとなってやってしまったんだろうと」

「じゃあ恭一は、捜査担当でないのね」

「俺は隠れていた、ただ署では、二、三日留めて調べるつもりだったのだが、俺が止めさせた」

「恭一が？」

「夕子の先輩だからというわけじゃあないぜ、深沢を犯人と見るには、どうも不審な点があったからだ」

「どういうこと？」

「まず指紋だ、凶器のナイフには指紋が一つもない、深沢が消したにしてはおかしい、ドアのノブには彼の指紋が付いていたからな、ナイフのそれを消すのならなぜドアノブも消さない、さらに彼の指紋には上から擦られたような跡があった」

「そうか、真犯人は手袋をしたのね、それに現れたのは深沢さんより後ということ」

「ああ、それからドアだ、深沢は、腹が立ったのでドアを思いっきりの力で閉めて帰ったと知っている、これは隣室の男の証言で確認が取れた、『何か大声が聞こえたと思ったら、ドアをたたきつけるように閉める音がした、その後しばらくして、何かを壊すような音も聞こえた』とっているんだ」

「それで？」

「ところが、遺体が発見された時ドアは開いていたんだ、早朝なのに開けっ広げのドアを見た管理人が不審に思って覗いたら遠藤が倒れていたということだ

「じゃあ深沢さんの後に来た犯人が、ドアを閉めな
いで逃げたわけね」

「そうだ、それに喧嘩でカッとなったのなら、ナイフで刺すというのもおかしいだろう、そばにあった花瓶や椅子のようなもので殴ったとでもいうのならわかるが」

「凄いいじゃない恭一、よく推理したわね、やはり」

「こら！私の教育がなんていうなよ、これくらいのことば、レストレイドでもわかる」

「あら、それ自慢？それとも恭一はレストレイド並みということ？」

「このやろう！だがな、捜査担当の者は今なお深沢が怪しいと見ている、なにしろ彼は被害者の部屋で争ったのだからな」

「ふうん、その人はレストレイド以下か、なんていつてる場合じゃないわね、先輩の窮地なんだから、そうだ恭一、恭一が警部だということ先輩にはまだバレてないんでしよう」

「ああ、俺は彼の前に姿を見せなかったからな」

「ちようどいいわ、私、先輩から直接話を聞きたい、ねえ行ってみましょ」

というわけで二人で毎毎新聞の本社を訪ねた。

「深沢の後輩ですか、彼今外ですよ、しかし彼が怒るのも無理はないなあ、左遷されるのを『うまいことやったな、いい気になるな』と皮肉られたというんだから」

「あら、それじゃあ先輩が犯人だと？」

「あつ、い、いや決してそんな意味で…」

「それ、人事移動のことじゃなくて、ほらあの晩餐会のことじゃないの」

そばで聞いていた女性が口を開いた。

「晩餐会ですか、どういうことでしょうか？」

「社長がね、自宅で晩餐会を開くの、そこへ呼ばれたうちの代表が深沢さんよ、遠藤さん悔しがってた」

「それ、よくあるのですか？」

「社長さん好きなのよ、ただ若手を招いたのは初め

てじゃないかしら、いつもは役付きだけ、そこで社の方針などいろいろと相談をするらしいわ」

「あつ、夕子君来てたのか」

深沢が帰ってきた。

「お仕事中ごめんなさい、聞きたいことがあつて」

「かまわないが、ここではちよつとな、出よう」

私たちは近所の喫茶店に入った。

「深沢さん、大変だったって」

「ああ、踏んだり蹴ったりというのはこのことだよ」

「殺された遠藤さんの部屋に行つてたつて、それどういうこと？」

「どうといわれてもな、来いという書付があつたので行つた、ところが遠藤は呼ばないという、そこで

いい争いをしたがすぐ帰った」

「どんな争いなのか？」

「おいおい、刑事の取り調べじゃあないか、まあ夕子君になら話してもいいが特別なことは何もない、お前が呼んだんだらう、そんな覚えはない、との繰り返しさ、ただ……」

「ただって？」

「帰ろうと背を向けたら彼は『うまいことやったからといい気になるな』と大声で叫んだ、腹立ちまぎれにドアを思いっきりの力で閉めたんだが、今冷静に考えると、彼の呼んだ覚えはないというのは本当だったように思える、となると、誰かにはめられたということか：それから、うまいこと、というのがわからない、私は左遷の身だからね」

「その、うまいこと、の話し、誰かにいったの？」
「いや、今初めてさ、警察にもいわなかった、虫の
好かない刑事だったから、口喧嘩をしたただけですぐ
帰ったと簡単に話したただけだ」

「ふうん、そうだったの」

「夕子君はね、一年生の時から名探偵だったのです
よ、でも叔父さん、どうして叔父さんがくつついて
るんですか？」

「あついや、街で偶然出会って、毎毎新聞へ行くと
いうからついて来たただけだ」

「なんだそうですか、いつも叔父さんがくつついて
いるから、夕子君何か仕出かしてるな、その監視役
に違いない、マーメイド事件ようなことにならない
ようにって、夕子君はかなりおっちょこちよいだか

ら」

「こら先輩！」

「何だこのガラクタ」

「電子部品よ、ほらこれ回路の基板、ふうん遠藤っていう人電子マニアだったのね」

「ああパソコンが五台もあった、みな鑑識が預かって分析中だ」

「ふうん、パソコンマニアでも自作派か」

夕子の希望で、被害者遠藤の部屋に入ったところだ、あたりには何かの部品らしいものと、絡まったコード類が一面に散らばっている。

「夕子、これがみな何だかわかるのか？」

「わかるわけないでしょ、私は文学部よ、でも電子

機器のものだってことは子どもでもわかるじゃない」

「まあそれはそうだが……」

「でも凄い、新聞記者というより技術者ね」

「パソコン関係の記事でも書いてたんじゃないか、そのあたりは何も聞いてないが」

夕子は手袋をつけ、電子部品をあれこれとさわっている、手袋をいつも持ち歩いているのだから、探偵気取りもいいたころだ。

「ふうん、そういうことか……ねえ、新聞社で最初に会った男の人、岸本といったかしら、あの人を逮捕したら？」

「何だと！」

「逮捕は無理でも二、三日拘留するのならできると」

しよう」

「おい、彼は容疑者のリストにも上がってないぜ、
どういうことだ？」

「深沢さんがいったじゃないの、遠藤が、うまいこ
とやった・・と喚いたって、そのことを知ってる
のは誰？先輩は警察にも話さなかったっていった
じゃない」

「ああ、深沢と俺たち二人だ、隣室の者は声だけで
意味はわからなかったというからな……」

「もう一人いるじゃない、深沢さんが帰るのを隠れ
て待っていたとしたら」

「そうか、犯人だな！」

「岸本という人、私たちにどういった？『左遷され
るのをうまいことやったと皮肉られたんだから』と」

「あつ、そうか！確かに彼はそういった、隣にいた女性も聞いていたな」

「そう、だからそれは深沢さんが犯人ということですか？と追及したら」

「彼は慌てて否定した」

「彼どうしてうまいことという言葉を知ってたの」

「夕子、犯人が自首して来た、被害者と同じアパートの二階にいた女性だ」

「そう、岸本という人の恋人でしょ、動機は遠藤による恐喝ね」

「何！そこまでわかってたのか！」

「大体はね、で、恋人の岸本さんが逮捕されたと思つて自首して来たのでしよう」

「その通りだ、彼女は職場の金に手を付けてしまった、恋人の岸本に打ち明けて相談したところ、それを知った遠藤が恐喝したんだ、遠藤は岸本まで脅し始めた、私のせいで岸本さんまでと思うと我慢ができなかつたといっている」

「ほぼ想像の通りよ、でも二人とも気の毒ね…」

「ああ、しかし夕子、どうしてわかった？」

「警察が気に留めなかった隣室の人の証言よ」

「、大きな声の後ドアを閉める音が、だろう、深沢の供述の裏付けになったじゃないか」

「その後よ、しばらくして何かを壊すような音が聞こえた、って」

「ああそうか、しかしそれが何だ？」

「私が被害者の部屋を見たいといったのは、そのこ

とが気になってたの、見つけたわ、盗聴器よ、遠藤は二階の女性を盗聴してたのね」

「それで女性の使い込みを知ったのか、とんでもないやつだ、しかしあの部屋にそんなものがあつたか？」

「ガラクタの中にね、おそらく遠藤はそれを見せて脅したんじゃない、この中にみな録音してあるぞなんて、だから彼女は遠藤を刺した後持ち出そうとした、ところがそれはパソコンに繋がってて外れない、ペンチでコードを切ろうとしたが切り外せない、あそこにあつたペンチの刃、かなり丸くなつてたわ、焦った彼女はそのペンチでガチャンと」

「ううん、それが、壊すような音、のことか」

「ところが予想以上の音がした、音を聞いて誰かが

来たらと、慌てた彼女はドアも閉めないで自分の部屋へ逃げ帰った」

「そうか、だがよく見つけたな」

「何かね、叩き壊されたようなものがあるはずだと思っただけ探したんだから簡単よ、コードにはペンチで切ろうとした後も付いてた、ガラクタと一緒にしたのは警察の仕業ね、パソコンを持ち出すときにプリンターやディスプレイを外すでしょ、その時何気なく外したんじゃない」

「ああ、大事なのはパソコンの中のデータだと思っただけだからな、だが遠藤のやつどうして盗聴など」

「バツカ！初めは脅迫が目的じゃなかったのよ」

「何？ああ、そうか」

「ねえ恭一、私晩餐会の計画してるの、参加してくれない」

「なんだと？」

「晩餐会よ、招待したい人がいるの、レストランを予約したのだけどちよつとね…」

「うん？」

「予算の方が…」

「そういうことか、で、どこだ？」

「ラ・メール」

「そうか、まあできるだけのことは…うん？お、おい、ちよつと待て、ラ・メールといえば都内でも最高級の！あそこで食事をする、給料の一月分が飛んでしまうといってたやつがいるぜ」

「そうよね、やっぱり安月給の恭一じゃあ…そうだ、

高知って魅力あるのね、坂本龍馬か…深沢さんまだ
独身だし…」

「な、何い！お、おい夕子、何いつてるんだ…」

ということで、私はラ・メールを訪ねた、なんと
いうことだ、夕子が予約していたのは個室ではない
か、そこは普通席より五割は高いはずだ。部屋に入
ると、夕子は一人でもう何かを飲んでいる。

「あつ恭一來てくれたのね！」

「ああ、う、うん…」

「来ないかと思ってたわ、費用のこと、私安心して
ていいの？」

「いいわけないだろう、俺は今夜夜逃げだ」

そこへ深沢が現れた。

「夕子君、君に送別会までしてもらわなくても」

「いらっしやい先輩、あら送別会って何？私は晚餐会とிட்டたはずよ」

「そだったな、しかし君にそこまで：そうだ忘れていた、君にはまずありがとうといわなきやあ、君のおかげで私の身は潔白になったし、わが社の事件も解決したんだからな、本当はわが社の方で君への感謝会を開くべきなんだ」

「あら私何もしていないわ、ただちよつとね」

「いや本当に感謝の表しようもない、君は相変わらず口は悪いが推理は凄い」

「こら、一言余分」

「しかし宇野さん、夕子君のような凄い人とどうやって巡り合ったのですか？」

「えっ、今何ていったの？」

「宇野さんですよ、おい夕子君、私はいくら鈍腕記者でも新聞社の事件記者だよ、警視庁のことぐらい」

「じゃあ私たち二人のこと知ってたの？」

「当然ですよこの前会ったとき叔父さんだといっただろう、もうおかしくて」

「わっ、一本取られてたのか、でも先輩の敏腕ぶり少しは残ってたのね、安心した」

「少しはないだろう」

と、その時女性が一人入ってきた。

「あっ！ああ、さ、佐代子！」

「夕子さんから聞いていますけど宇野さんですね、はじめまして、私、毎毎新聞高知M支局の通信員、小野佐代子と申します」

「さ、佐代子！な、何だと！」

「深沢さん、今度は同僚になるわけですね、よろしくお願いします」

「な、何い！」

「こら先輩、何うろたえてるの、ねえ先輩、自分の会社の社長さんの名前ぐらい知ってるでしょ」

「小野だ、あつ：」

「じゃあ社長さんの出身地は？」

「そ、そこまでは：」

「じゃあ口の悪い夕子が教えてあげるよ、敏腕記者の先輩のためだもんね、フッフ、社長さんの出身地は高知県のM市、毎毎新聞M支局って社長さんの実家よ、小野佐代子さんの家でもあるけど、嫌だ、子どもの時の口調になっちゃった、このカクテル強い

んだもん」

「あっ……じゃあ！」

「わかったでしよ、小野佐代子さんは社長さんの愛娘」

「ごめんなさい深沢さん、私、深沢さんからの申し出を受けて、もう嬉しくて舞い上がってしまった、まともなご返事もしないでお別れしたのですけど、嬉しさのあまり父の家によって話したのです。」

「そうか、お前が選んだ男なら間違いはあるまい、会ってみたいな」

「じゃあ明日にでも」

「うん、いや待て、わが社の記者だといったな、連れてこなくても呼べばいい、よし晩餐会だ」

「でもお父さん…」

「よし、お前はすぐ高知へ帰れ」

「えっ、それどういうこと？お父さん！」

「心配するな、晚餐会で会って、いいやつだとわかつたらすぐ高知へ行かせる」

「やめてよお父さん！それってまたお父さんのいたずらじゃないの」

「いいじゃないか、深沢といたな、高知まで飛ばされたと思ってくさって行くだろう、そこでお前に会ったらどんな顔をするかな、ハハハ」

「と、いうわけで仕方なく私は高知に帰ってたのです、父はいたずら好きで、それだけならいいのですが、もう一度いいだしたら止めてといっても聞か

いものですから」

「と、いうことよ深沢先輩、これで先の一本はお返し」

「ううん、参りました、嬉しい一本をありがとうございます君、そうか遠藤がいった、いいこと、’というのはい…」

「社長さんが晩餐会には先輩を出席させるようにといった指示か何かをどこかで聞いたのね、そして先輩の行き先が高知県M市、なぜだ？’と思って調べた、高知県M市をネットで検索すれば、社長の出身地だということはすぐわかるわ、私も同じことをしたんだけど、彼こそ本当の敏腕記者じゃないの」

「夕子、岸本も、いいこと、’というのを知っていたのは？」

「ああ、あれは犯人の恋人から聞いたんじゃない、犯行の後岸本さんに打ち明けたんだと思う、だから恋人をかばった岸本さんは、私たちにまるで深沢さんが犯人かのようないい方をした、それから遠藤が深沢さんと呼んでいるという書付、あれは犯人の仕業ね、電話して来たのを社の誰かが受けたのよ、二人は喧嘩をするに違いない、そうすれば当然疑いは深沢さんにかかるよ」

「相変わらず凄いな夕子君、何かお礼をしたいんだが私では満足なことが…」

「いいのよ先輩、今してもらってるじゃない、あのね、今日の本当の主催者は社長さん、でないと私がおんな高級レストランで会が開けると思う？恭一じやあ全く頼りにならないし」

「おい、一言余分だ」

「フフフ、私ね、社長さんに会ったの、社長さん、事件解決のお礼がしたい、なんでもいい希望をいつてくれっていうから、じゃあ社長のいたずらを私に譲ってくださいって、フフフ先輩の驚く顔を見たかったのよ、そうしたら会場は私に任せてくれて」

「か、完全にまいった」

「じゃあ私たちはこれで、恭一、失礼しましよ」

「ええっ！夕子君どうして？」

「あら、お二人だけの方がいいでしょ」

「し、しかしすぐ帰らなくても」

「深沢先輩、やはり鈍腕記者ね、私達も早く二人だけになりたいの！」

「ま、まいった」

私たちは席を移した。

「おい夕子、深沢を仕掛けただけでなく、俺もからかったな、費用が足りないなどといって」

「キャツハハばれたか、私高知に行こうかしらといったときの恭一の慌てぶり、キャハハ」

「こら夕子、カクテルが本当に効いてるぞ」

「うん、これおいしいんだもん、でどうする？社長さん何でも自由にしてくれていいって、フルコースでもオーダーする？」

「やめところ、こんなところ料理よりラーメンの方が美味しい」

「しっ、聞こえるわよ、でもそれ賛成、で、この後

は？」

「まずラーメン、それからホテルへ行こう、夕子が気に入っている例のホテルの部屋を取ってある」

「えっ！今何と聞いたの？」

「夕子お気に入り例のホテル」

「その後よ、今日の予定を知らないはずの恭一がどうして部屋を予約できるの？」

「すぐ二人だけになれるとわかってたからさ」

「まさか、どうして？」

「いいか、まず夕子がこんなレストランを選ぶはずがない、ここは社長クラスが来るところだからな、次に、社長が夕子に礼をしてもおかしくはないが、それなら夕子を招待という形になるはずだ、ところが夕子は自分が誰かを招くようなことをいった、そ

ここで夕子のことだから社長のお礼を利用して何かをたくらんでいるのに違いないと気が付いた、今度の事件で俺たちが関係したのは深沢だけだが、助けた深沢を招待というのはおかしいだろう、まあもつと気楽な所で送別会をならわかるが、となるとまだ誰かを：と考えた時に思い出したのが深沢の消えた恋人さ、後は高知県警に問い合わせて一件落着」

「すごい恭一！それレストレイドでなくてホームズじゃない、一本取られてたのか、まいりました！」

「からかったお返しさ、でいいだろう先にいった計画で」

「一つだけだめ、ラーメンは抜きにしてすぐホテルへ行きましょ」

了

眞作幽霊晚餐会

<http://p.booklog.jp/book/107235>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107235>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107235>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ